

2009年8月4日 現地講義

## インドネシアの自然地理

古市剛久（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

地理・地質、気候、森林資源、泥炭湿地の側面からインドネシアの自然環境を概説した。

一般に、インドネシアの地形（地勢）は、スマトラ、ジャワ、ヌサ・テンガラ、カリマンタン、スラウェシ、モルッカ諸島、ニュー・ギニア、の7地域に区分される。この大地形は、オーストラリア・プレートがユーラシア・プレートの下へ沈み込む（スマトラージャワーヌサ・テンガラ）、あるいは太平洋プレートがユーラシア・プレートの下へ沈み込む（スラウェシーモルッカ諸島ーニュー・ギニア）プレート境界（島弧ー海溝系）に立地することを反映した構造を持つ。島弧ー海溝系を形成しているインドネシアでは地殻変動が盛んである。活火山は150にのぼり、地震も頻発している。2004年12月26日のスマトラ沖地震（ $M=9.1$ ）は典型的なプレート境界型（海溝）地震であり、海底断層の出現により津波が発生し、特にインドネシア、スリランカ、インドで大きな被害が出た。北緯10度～南緯10度に位置するインドネシアは、ケッペンの気候区分では、全域が熱帯に区分される。この緯度帯では台風及びサイクロンはほぼ全く発生・通過しない。降雨は季節変動する地域（例、雨季のピークはジャカルタやマカッサルでは12月～1月、アンボンでは7月～8月）、季節変動が少ない地域（例、バリックパパン）があり、これには熱帯収束帯（ITCZ）の周期的な南北移動に伴うモンスーン（季節風）と地域の地形が影響している。また、インドネシアの降雨量は平均して約5年周期といわれるエル・ニーニョー南方振動（ENSO）による赤道太平洋東西断面の気圧配置にも影響を受ける。エル・ニーニョの際には西太平洋地域（インドネシア）では少雨になる傾向が強い。東南アジアにおける1990-2000年の森林面積変化を見ると、インドネシアでは約130,000 km<sup>2</sup>の森林が消失した。これは東南アジアでの同期間の森林消失の5割以上を説明する。東南アジアの熱帯林の減少率は、アマゾン熱帯林、アフリカ赤道部熱帯林と比べても大きいことを考え合わせると、インドネシアにおける森林資源の持続的利用と管理は地球規模の課題であると言える。開発（農地化）のための泥炭湿地からの排水は、泥炭地荒廃（パイライトの酸化に起因する酸性硫酸塩土壌の生成）や泥炭火災（大量の炭素放出）を生む主要な要因となっている。

（記録：古市剛久）